
名もなき世界の物語

ゆう一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名もなき世界の物語

【Zマーク】

Z8932D

【作者名】

ゆうー

【あらすじ】

とある世界にはまだ、魔法とゆう力が人々の中に眠っていた。その世界のラスアとゆう都市のはずれにルルとゆう一人の少女がいた。

第1章 空中バイクを追つて（前書き）

オリジナルの小説です！！

がんばって作りました！！

第1章 空中バイクを追つて

第1章 空中バイクを追つて

さかだつた金色の髪がよく目立つ青年が

夜の闇の中荒野で一人、空中バイクの明かりをたよりに走らせていた

旅人なのか、その服はボロボロで汚れていた

口はマスクで覆っていたがその、水色の目はどこか悲しみを見せて
いた

そして、彼は目線の先にある都市を獲物を見る様に見つめていた

「こ」は、ガルベリア王国の王都ラスア。この世界で小さくもないが大きくもない都市だが、高い建物が並びその上には空中艇や空中バイク、国々を結ぶ空中列車などがひしめく様に飛んでいた。ラスアの中心には、ガルベリア王国の宮殿などもあり、ラスアの中心の街は、いつも活気づいていた。

だが、この都市の北のはずれは、そんな街中の様子をつかがつよつに、ひつそりとしていた。そして、そこでは、牧場や農場などを営みながら暮らす者が多いが、16年前にここに越してきたある親子がいた。その親子は小さな小屋と、小さな畠と、小さな武術塾を営む。少し変わった親子がいた。

そして、その、武術塾はこの辺では、有名な武術塾だつた。

『クラウルさん！ 今日もお稽古ありがとうございました！』

眼鏡をかけて、黒髪の寝癖で少しげしゃりとした14歳ぐらいの少年が、煙草をふかしながら、武術塾の木でできた受付の台に足を乗せながら、座っているだらしない格好をした男に、尊敬の眼差しで挨拶をした。

『おう。ひょー。また、おいで』

クラウンは、青の薄い髪の頭をかきながら、静かに言つた。

『ひょーでは、ありません！ こう見えてもあと、半月たてば15です！ 立派な騎士になつてガルベリア王国をお守りするのです

！…それに、僕の名前はひょっこりではなく、アルとやつ立派な名前があるのです！』

『おお～それは、わるかったな、アル。』

反省している気がないように、クラウンはそっぽを向いて謝った。

『ちっく

アルは、怒ったように口元を震わせた。

『刀を握れば、すごいお方なのに・・・』

そして、ポツリと小声で言った。

『それより、クラウンさん。ルルさんは、今日はいらないんですか？ ルルさんにも、教えてもらいたかったのに・・・』

アルは少し残念そうに言った。

『ああ～アイツなら、今、街の方に行きに出しに行ってるよ。』

『せうなんですか！－ルルさんは、しっかりしていてとても偉いですね！－クラウンさんは、大違いですね！－』

クラウンはしばらく間をおき、ゆっくりと頭の上の紋章らしきものを見つめてゆづくと、煙草の煙を吐き出した。

『・・・やうだな・・・』

ルルは、アルと一ツ上のクラウンの娘でクラウンの青の薄い髪の色とは、違ひ紅の色をした髪の色で毛先がクルリとしていてこの国で一番とされている剣術をほこつてているクラウンの次に上手いと認められている。剣術といつても変わった剣で、クラウンはその剣の事を”かたな”と呼んでいる。

ルルは、今、ラスアの中心である市街地で買出しに行っていた。

市街地では、毎日たくさんの屋台が並んでおりラスアで一番の商売地でいつも、かつぎずいていたが

今日は、人通りがまばらで、その変わりに鎧を着た騎士がたくさんいたのだった。

『おお～ルル！～今日は、買出しがい？？』

魚屋の親父が買い物かごを持つたルルに話しかけた。

『うん！～そうなの！～パパはいつも、ダラダラしてて、お稽古しかまともに体、動かさなくて、私しか買出しにこれないから』

ルルは明るく答えた

『ははは～～～じゃ～そんなんルルに免じて、おじさんおまけしてあげるよ～～』

魚屋の親父はニッカラ～と笑つてかなり、大きめな魚をルルに渡した。

『ありがとう！！助かるよ！！おじさん！』

ルルが笑顔で答えた。

すると、隣の果物屋の親父がでてきた。

『へー！何が今日は特別だ！ルルには毎日特別だろ』

『うるせいやー！』

魚屋の親父は少し照れたように言つた。
それを見ていたルルは、くすくすと笑つた。

『そういやそうと・・・昨日の夜。サスライ人が門番の監視を退いてこの街に入ってきたそうだ・・・』

果物屋の親父は深刻そうに言つた。

『だから、こんなにたくさん軍の騎士がいるのかしら』

ルルは周りを見た。

『ああ～そうかもな～そのサスライ人かなりの使い手で剣術もかなりの腕で、魔力もそこそこあるとか・・・ルル。気をつけろよ！いくら剣術がこの国で2番手だとしても・・お前は女だからな・・・』

果物屋の親父は真剣な眼差しでルルを見つめた

『わかつた！！気をつけるね』

ルルはそう答えると魚屋と果物屋を後にした。

『さて、もうそろそろお家にもどらないとな』

ルルは、ラスアの都市のちょうど中心にある、橋を渡っていた。そして、ふと橋の下に

流れている川に田をやり、田の前に広がるガルベリア王国の宮殿に目をやつた

ガルベリアの宮殿は、3賢者の魔法によつて3つのドーム型の建物となつており一番小さいドームの

一番でっ�んには、魔法の力によつて生まれた時から眠り続ける姫が眠っているとゆう噂があり

その奥のドームは王族以外誰入つた者はいないとされていたのだった。

『・・・王女様が眠つてゐる宮殿か・・・

風がよそよそと、ルルの髪を撫でた

『いつたい、どうゆう人なんだろ・・・』

しばらく、ルルはその場で宮殿を見つめていた。

すると、急に風が強くルルに当たってきた。

ざわわわわ

『な、何?? 風つよ! -!』

ルルは、おもむろに風が強く吹いてくる後方を見た。すると、金色の髪をした顔を半分マスクで覆つて

不思議な青年が空中バイクに乗つてルルの方へ飛んできた。
レレは青年の顔を見た。

ノリは青空の夢を見た

その青年も橋にいる少女が気になつたのか顔を少しルルの方へ傾け目でルルを見た。すると、時間がその瞬間だけ、止まつてしまつたような、不思議な感覚になつた

ルルは青年の水色の目の奥がキラリと輝いたように見えた
ルルはぎゅうっと自分がもつている買い物かごを、握り締めた。

目
·
·
·
綺麗

ルルはそう、ポツリとつぶやいた

青年は目でルルを確認した後、目を細め、また、宮殿の方へ顔を向けるものすごいきおいで飛んでいったのだつた。

七八

『世界!』

ルルは顔を隠した

『すつごい風！－あの、空中バイク・・・きっと風の力を使つた魔法でとんでいるだろうな。』

ルルは、青年が飛んでいた宮殿の方を見た
だが、もうそこには、青年の姿は見られなかつた。

『あーーー』んな事してられないーーー！パパが待ってるから、早く帰ら

なきやー

ルルは、街のはずれにある自分の家へ戻った。

『ただいまーーーー』

『おかえり。』

クラウンは、小さいテレビをつけながら、新聞を読んでいた。

『また、テレビ見ながら、新聞よんでもるー』

『俺は、起用だから何かと一緒にやらなきゃ駄がすまないの。』

『起用とか・・・関係ないよ・・・』

ルルは呆れながら言った。

ボツツカアン

すると、街の方から、何かが爆発する音が聞こえた。

『な、何??』

ルルはびっくりして、座りこんでいた。クラウンは急いで窓の外を

見た。

『・・・・・富殿が燃えている。』

クラウンは静かに言つた。

『え？？？？！…』

ルルは自分の目で確かめようと急いでクラウンがいる窓の方へ向かつた。
すると、富殿が真っ赤の炎につつまれていて、富殿の上には大きな軍事用の空中艦が飛んでいた。

『空中艇が・・・なんであんな所に・・』

p.i p.i p.i

クラウンのポケットの中から電子的な音がなつてゐる。

クラウンはポケットの中からガルベリア王家の紋章が付いている二つ折の機械らしき物を出した。

クラウンがその機械を出すと二つ折の機械は自動で開いた。そして立体映像でガルベリアの紋章がクルクルと周りながら出てきた。

ザザザザ・・・・

すると、何か音が聞こえた。

ルルはのぞくように、その機械を見た。

【ゼロゼロゼロ・・・ク、クラウン、ハゼロゼロ・・・れ、聞こえるか?】

『あー聞こえるよ。』

クラウンは冷静にその機械に向けて話した。

【富殿の結界が破られた・・・・ゼロゼロ・・我々だけでは歯がたたら・・・ゼロゼロ、至急応援をたのむ・・・ゼロゼロ】

『了解。』

【た、隊長!・・ゼロゼロ・・敵が・・・・ピース・ゼロゼロ】

ゼットがああああああああん

『やあ!・・・』

ラスアの空に赤い光が広がった。

生々しい戦場の現場をルルは無線で聞いてしまい。身震いがした。

【ゼロゼロゼロあああああ】

ブツシン。

無線の音が途絶えた。

『ゼロゼロゼロ・・・出番がきたよつだ。』

クラウンはそのままつと、受付にあるボタンを押した。すると、受付が半分に割れ中から、黒い箱が出てきた

『何？？箱』

ルルは始めて見る箱だった。

クラウンは黙っていた。そして、箱の上にあるA～Xのアルファベット

と0～9までのボタンならしきものを、右手で高速で何かをうつたすると

箱が開き、中から研ぎ澄まされた刀と拳銃と透明の水色の水晶が出てきた。

クラウンはそれらを、装備し、頭に王家の紋章が書いてあるターバンを戴いた。

『もしかして、行くの？？』

『・・・・・・・・・・・・』

クラウンは、黙っていた。

『私も・・・』

『駄目だ。』

クラウンはルルがすべて言つ前に返事を返した。

そして、その目はいつものクラウンの目と違い鋭い目をしていた。ルルは、その目を見てぎゅうっと両手を握りしめた。

『・・・・・・・』

『お前は、ここにいる。』

そつぱりと、クラウンは何かブツブツと呪文を説いた
すると、クラウンの左手にある水晶が光ってクラウンを
つつみ込み、クラウンは消えた。

しばらくルルは椅子に座りこんで、考えた
たまに、何度かあの、王家の紋章が書いてある機械の無線に呼び出
され

クラウンはいつも、宮殿に向かう事がある。だが、ルルがあの紋章
について聞くと

クラウンは言うのだ。『気にしなくていい。』と、それと、ルルは
実の父なのにクラウンに
ついて、知らない事がたくさんあった。生まれた場所や、若いころ
の話。母親の事。

何一つ知らなかつた。

どうして、実の父親なのに、自分は父の事を何も知らないのだろう
と。

そう、思つた瞬間窓の方から、眩しい光が見えた

ドッゴン

ルルはすぐに窓の外を見た。

『あーあああああー街がーー』

なんと、空中艇はラスアまで攻撃をしていたのだった。
ルルは、震えて、座り込んだ。

『ビ、ビツヒテ……なんですか？』

その時、ルルはふと、頭の中にクラウンの顔が出てきた。

『パパ……』

ガチャン

ドアが開いた。

『パパ！！』

ルルは、ドアの開いた方を見た。

『ルルさん！！』

アルが心配して、ルル達の様子を見に来たのだった。

『アル！…どうして？』

『外が火の海で…心配で来てみたんです。クラウンちゃんは…？』

アルがそう聞くとルルは答えた

『分からぬ…富殿に行つた…』

『富殿に？？？富殿はマケドニア帝国の騎士達がつじゅうじゅういる
しいですよ？？？』

『そ、そんな…ビツヒテ？？マケドニア帝国がラスアを襲わなきゃ

ならないの?』

ボカン

すると、今度は近くで爆発のような音が聞こえた。

『ルルさん!...』には、危険です。すぐに場所を移動しましょ!..』

アルが外の様子をつかがいながら言った。

『ひ、うん』

ルルはそう言つとアルは玄関へ向かつた。

『アル!...ちょっとまって!...』

すると、ルルは何か嫌な予感がしたのか自分の部屋に戻つた。すると、ルルは自分の部屋の壁に飾られている、刀を手にした。その刀には、"朱雀"《すざく》と記されていた。そして、ルルはその刀を見ながら、クラウンが言つた言葉を思い出した。

* * * * *

『ルル、何かあつた時は、この朱雀を持って行きな。』

『パパ、パパはどうして、ふつうの"けん"をつかわないの?..どうして、"かたな"じゃなきやいけないの?..』

幼いルルが、若いクラウンに聞いた。

『昔、和国とゆう国があつて、刀は魔を斬る力があるとしていたんだ。朱雀は和國の天の王の力が眠っているんだよ』

* * * * *

ルルは、ゆっくり目を開け、朱雀を握り締めた。

『ルルさん！…早く…!』

ルルは急いで、アルがいる方へ向かつた。

外に出ると、ラスアの空は赤い緋色をしていた。
幸運にも、ルル達が住んでいる地域には、攻撃をされていなかつた。

『いつもだつたら、空中艇があるはずなのに…』

『きっと、マケドニア軍がラスアの空を占領したのでしょう…』

アルは空を見上げながら眼鏡のふちを持った。
すると、後方から凄まじい風が、ルル達を襲つた。

『うわあ～～～～

アルは顔を手で覆つた。ルルは身に覚えがある風だったのでもしゃ、
と思い
風が吹いてくる方を見た。すると、小屋の上から、空中バイクが飛
んできた。

すると、その空中バイク次に、大きめな空中バイクが後をついてき

たのだった。

ルルは、その始めにきた、空中バイクを皿を凝らすように見た。すると、そこに乗つて

いたのは、毎みかけた、あの青年だった。

『あの人・・・』

ルルはポツリと言つた。

『え？？』

アルは目を開けた。

すると、ルルは、空中バイクを追つた。

『ルルさん！-！どこに行くんですか！！』

つかさず、アルはルルの後を追つた。

『あの人、きっと、マケドニア軍に追われているんだわ！！』

『なんなんですか？？知ってる人なんですか？？』

アルはルルの後を追いながら聞いた。

『知らない。だけど、助けなきや』

『どうやってですか？？相手は空ですよ？？』

すると、大きめな空中バイクは青年にミサイル発砲した。

バン

『あーーーーー』

ルルは叫んだ

青年はミサイルを避けようとしたが、ギリギリのところでぶつかった
青年が乗ったバイクは、起動が不安定になり、だんだんと高度が下
がつていった

青年は、あせってバイクに魔法でエネルギーを送るが、バイクは不
安定のままだった。

軍の空中バイクは、止めを刺すめ、また発砲の準備をした。

『止めを刺す氣だーーー』

アルは走りながら、様子を見ていた。

『なんですってーーー』

ルルはアルの言葉を聞き慌てた。

軍の空中バイクが発砲しようとしたその直前。青年はバイクから、
手を離し右手で左手を

抑えながら、なにか呪文を唱えてるようにルルには見えた。

『もう一駄目だ。』

アルは残念そうに言った。

青年は、その格好のまま上体を、軍のバイクの方に向けた。すると、

左手から、小さい黒い円の様な物

が青年の左手から、発射され、軍がミサイルを発射した。すると、その黒い円がミサイルとぶつかった様に見えたが、黒い円はそのまま軍のバイクの方に進み、ミサイルは消え、そのまま軍バイクへぶつかった

どつかかかかかかかん

先ほどの爆発よりも、激しく、そして明るい光だった。

ルルとアルはしばし、その場で凍りついた。

ルルは、青年の方を見た。すると、青年はさきほどと変わらない格好で、右手で左手を抑えながら、左手を見ていた。すると、苦しそうに手を抑えていた。

『何が起こったの？？』

ルルは、軍の空中バイクを見たが、その姿は見えなかつた

『ルルさん！－何か様子がおかしいです！－！あの人！－』

アルは青年の方を指で指しながら言った。

すると、青年はさきほどよりも、苦しそうに手を抑え、もがいていた。

空中バイクは、風の力を失い、落下していった。

『あ、落ちてく！－』

アルがそう言つと、空中バイクは宮殿の方へ落ちていった。

『宮殿の方だわ！ 行つてみましょ！』

そう言つて、ルルは宮殿に向かつて走つていった。

『ルルさん！ そつちは危険ですよ！』

アルは、ルルをそう言つて追いかけた。

街の方は、あちこちで火災がおこつていて、いつも活氣づいていた街と違つていて、全体が緋色で焼けた臭いが漂つていた。ここに住む人々はどかかへ、逃げていつたようで誰もいなかつた。

『ひどい・・・ラスアの街が・・・』

アルは辺りを見渡して悲しげに言つた。

ルルも、あちこちを見渡した。

宮殿の近くまで、くると、壊れた空中バイクが乗り捨ててあつた。

『これ・・・』

ルルが、空中バイクに近づいていった

『待て！！』

突然、後ろから声が聞こえ、アルとルルは振り返つた。

すると、四方八方から、マケドニアの軍の騎士がルル達の方へ來た。

ルル達は、マケドニア軍に囲まれてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8932d/>

名もなき世界の物語

2011年1月30日02時47分発行